

19世紀英国における日本の玩具の受容

—独楽を一例として—

濱島広大

はじめに

英国における日本趣味の高まりの現れの1つとして1885年にナイツブリッジに作られた日本人村がある。日本人村では日本人が扇子、漆器類、青銅器、玩具類を販売し、さらには踊りや独楽回しなどの芸を披露しており、日本人村という名に恥じぬほど日本の村を再現していた¹。そのような一大イベントの開会式において開会の宣言を行なったのが、初代駐日全権公使のラザフォード・オールコック(1809-1897)であった。オールコックは1862年第2回ロンドン万国博覧会において日本部門を監修し、日本趣味の火付け役として知られる人物であるが、自ら書籍や論文を王立地理学会や『エジンバラ・レビュー』などに投稿するだけでなく、日本について書かれた本の書評を執筆したり、日本についての講演も行なったりと、全権公使の地位を辞した後も精力的に日本について紹介し続けていた。オールコックを開会式に招待したのは日本人村に箔をつけるためではあるが、オールコックも開会の挨拶において自身の日本論を展開している。オールコックは「玩具や屏風や扇子のような、多くの最もありふれた品が、このイングランドはもちろんヨーロッパ諸国において、ヨーロッパの職人たちにとって[仕事を奪うため]厄介なものとなってきたことは間違いないことであり、そのような対立や競争を乗り越えて、それらの品々は卓越さも価格もヨーロッパの品と比べて同等のものであるが、価格については商人が高い利率を掛けた後であっても[安価]だ」と述べている²。つまり、日本の品は質が高いのに値段も安く、日本人村で日本の品を買うべきであると宣伝しているわけであるが、宣伝も兼ねているとはいえ彼の開会の挨拶において日本趣味を考える上で、珍しい品が言及されている。それは「玩具」である。扇子は、アンナ・ジャクソンが「1870年代までにミドルクラスの客間は1羽の鳥が描かれた『盆や扇子や茶器』なく完成することはなかった」と述べているように、日本趣味の代表的な品であった³。また、桑和沙が「中産階級の家庭でいわば家具として実際に使われた屏風」と述べているように、屏風も家庭の必需品の1つとして日本趣味を代表する品であった⁴。オールコックによってそれらの品と並列されて言及された玩具

は日本趣味の品としては珍しいものである。しかし、オールコックは日本人村という「日本人の生活と産業に関する唯一の展覧会」において、日本人、特に日本人の職人の「労を惜しまない性格」や「細部への入念さ」、「たくましい商魂」を知ることができる品の1つとして、扇子や屏風と同等の価値を玩具に置いて紹介している⁵。

そこで本研究ではオールコックが1885年の日本人村の開会の挨拶において玩具を重視した理由を、独楽を例とし、当時出版された雑誌や書籍を考察する。その中で、19世紀英国において日本の玩具が近世社会と結びつけられて理解されていた品の1つとして機能していたことを論じていく。

まず玩具について考察する前に日本がどのように捉えられていたかを、特にオールコックの論文を中心に概観し、70年代に生み出された Old Japan について見ていく。

1. Old Japan の創出

近世社会が色濃く残る国としての日本（1860年代以前）

1853年にペリーが来航し、翌年の1854年に日米和親条約を結んだことで日本はいわゆる鎖国体制を破棄し、欧米列強との外交関係を築かなければならなくなった。イギリスはアメリカに7か月遅れる形とはなったが、1854年に日英和親条約を締結し、外交関係を築くことができた。しかし、英国人にとってオランダ人を風刺する材料として日本人が登場する『ガリヴァー旅行記』を通して良く知っているおとぎ話の舞台としての国、日本との交渉を行なうには、東アジアに詳しい人物を外交官として派遣する以外に英国に手はなかった⁶。そこで、隣国である中国において約15年間外交官の職に就いていたオールコックが初代総領事に任命され、1859年に日本に到着する。オールコックは直ぐに公使の職にも就き、領事部門と外交部門の長となり円滑な業務体制を確立した。この業務体制の確立により、後任のハリー・パークスやアーネスト・サトウも恩恵をあずかることとなる。

1854年に日本との国交を回復した英国における日本論は50年代の後半から多くなる。50年代における日本に関する著述家の筆頭と言えばジェラルド・オズボーンであるが、海軍大佐としての業務経験をまとめて『ブラックウッズ・エジンバラ・マガジン』に投稿しただけであり、本格的な日本論というよりも日本旅行記に近いものであった⁷。60年代に入っても基本的な傾向は変わらず、例えばホープ提督とともに日本を訪れたウィルソンが1861年に短い論文を『ブラックウッズ・エジン

バラ・マガジン』に投稿している。しかしウィルソンの論では中国と比較しながら、日本の自然が持つ景観美を賛辞するなど日本論を展開しようとする姿勢が見られる⁸。そのような旅行記から脱し、考察するという姿勢に基づいて書かれたのが、1863年に出版されたオールコックの『大君の都』である。『大君の都』は日本について様々な観点から考察することを意図しているため、自身が残した日記を基にしつつ、日本人の生活、日本語、工芸品、日本の文明、日本の宗教などについて議論を展開している章もあれば、役人たちの対応の仕方、富士登山体験、東禅寺事件の様子など自身の体験や観察を詳細に述べている章もあり、多彩さと分量を誇っていた。体系的な整理がなされていないという点は残念ではあるが、マックファーレンの『ジャパン』(1852)といった体系的にまとめられた著作以上に『大君の都』が珍重されたのは、オールコック自身の長年に渡る外交官の経験に基づき、日本と中国を明確に区別し、東アジアの国という曖昧な捉え方ではなく日本という1つの国として捉えられたことが大きい⁹。オールコックの中国と日本を比較する姿勢は『大君の都』全体に見られ、例えば陶磁器の産地として知られる岡崎までの道の舗装具合という些細なことを紹介するために中国の道を引き合いに出すなど、オールコックは中国と日本は全く別の国であるという視点を常に持ち続けていた¹⁰。実際、オールコックは『大君の都』を出版してすぐ後の1865年に‘China and Japan’という論文を『エジンバラ・レビュー』に投稿しており、日本と中国を比較するという姿勢はその後も続く重要な視点としてオールコックの日本論を支えることとなる¹¹。

英国において1860年代までは「日本の発見」と言うべき時期であり、日本について語れば日本趣味に直結する時期でもあった。その要因として最も大きかったのが当時の日本社会の状況である。当時の日本は幕末騒乱の時期であり、1862年の万博で提示された品々を実際に使用し、生活する人々が多く存在していた。だが、70年代になると明治時代の幕開けと共に文明開化が進み、多くの英国の芸術家たちを魅了した品々を使う人々が減少することになる。その影響により英国人はOld Japanという語を使い、近代国家となりつつある日本から近世を見出そうとし始める。

近世社会の残滓が残る国としての日本(1870年代以降)

1870年は明治3年にあたる。そのような文明開化に邁進していく日本をオールコックは好意的に受け止めており、‘Reform in Japan’において「我々が日本にとって、すなわち西洋世界のより先進的な文明や知識が与える刺激的な糧をすべて吸収しようと熱心に求めている国にとって、最も危険な要素の1つが怠惰である」と述べているように、文明開化を止めることを問題視している¹²。だが、オールコック

は既に外交官の職を辞しており、日本にはいなかった。1860年代後半から70年代の騒乱期に日本で務めていた外交官の1人である A. B. F. ミットフォード(1837-1916)は既に日本が変化しつつあることに気がついていた。ミットフォードは1871年に『古き日本の物語』を著しているように、明確に Old Japan という視点で日本を考察している。ミットフォードは日本人の内生活(the inner life of the Japanese)がまだ知られておらず、具体的には宗教、迷信、思考方法、彼らの隠された原動力について知らないという考えから、迷信に注目しこの本を著したと述べている¹³。ただ、Old Japan という用語は一見すれば実際に民話や昔話を取り扱っているということを端的に表しているだけのように見える。しかし、ラフカディオ・ハーン(1850-1904)はこのようなミットフォードの姿勢を重要視していた。ハーンは、1894年に出版された、日本についての最初の著作『知られぬ日本の面影』において、ミットフォードの『古き日本の物語』に触れた上で、「日本人の生活の素晴らしい魅力は、全世界の他の地の生活とは全く異なるものであり、西洋化された階級には見られなくなっているものである」と述べており、欧化した New Japan に対しては関心を示さない¹⁴。Old Japan という語にはハーンほどの批判的な意味はないが、ミットフォードは Old と New という語で分けるに値する変化を日本社会に対して読み取っていた¹⁵。

オールコックは当時日本にいなかったものの、Old Japan という視点を1874年の『クォーターリー・レビュー』に投稿した書評で用いている。そこでは日本について書かれた3つの書籍について書評しているのだが、タイトルを'Japan as it was and is'とし、Old と New を区別しているのはもちろんのこと急速かつ完璧なまでの欧化に対して一定の賛辞をオールコックは与えている。タイトル通り、書評をしながら展開されるオールコックの論は Old と New を意識した内容であるが、その中でオールコックは Old Japan の要素を芸術に見出しており、「生活の芸術」(the arts of life)と称して「日本の熟練の職人による、絹織物、刺繍、陶磁器、青銅器、金属製の芸術作品は依然として西洋世界の同じ製品を作る最も先進的な職人たちの羨望の対象となっている」と称賛している¹⁶。オールコックが『大君の都』以外で書籍として出版した日本に関する著作は1878年の『日本の美術と工藝』のみであり、1870年代になりオールコックにとって美術品と工芸品は日本を捉える上でより一層重要なものとなってきたのである。

そのように考えた上で改めて1885年の日本人村の開会の挨拶においてオールコックが玩具を屏風や扇子と同列に扱ったという事実は、当時の英国における日本趣味を考えるに当たって物珍しいものを併置させたという客観的な事実以上に重大な意味がある。次に、日本の玩具がどのように受容されたかをオールコックの芸術や

工芸に向けた視点を交えながら考察していく。

2. 日本の玩具の受容—自然探求の眼差し

19 世紀英国における独楽と日本

独楽は落ちた木の実が回転する様子を見て考案された玩具で、世界各地に独楽の起源が存在する¹⁷。ただし英国と日本を比べたとき、独楽の種類においては圧倒的に日本の方が多く、独楽に対する関心の差は大きかった¹⁸。グッドマンが「木製のこまや、簡単に彫刻した動物——そしてのちには列車——の模型で遊んだ子どもはおおぜいた。この玩具はほとんどの家庭で手に入り、比較的裕福な労働者階級や下位中流階級の子どもなら塗装されたものを持っていた。それよりはるかに高価だったのがブリキの玩具だ」と述べているように、ヴィクトリア朝の子どもたちにとって独楽は一般的なものであった¹⁹。

このように独楽に馴染み深い英国人たちに日本の独楽はどのように受け止められたのか。日本の独楽が初めて公式に紹介されたのは 1862 年の第 2 回ロンドン万博の日本部門である。公式カタログに拠れば、オールコックは教育に関わる書籍と玩具を子どもに関連するものとしてまとめ、8 つの独楽を展示している。英国で既にあった糸引き独楽やたたき独楽に近いものも紹介されているが、飛び出し独楽や飛び独楽の一種と思われる「小さな独楽の一群で満たされている」と説明書きがされている独楽もあり、これらは英国人にとって初めて眼にする品であった。オールコックはそのような珍しい独楽に加えて「独楽に関しては並び立つ者は存在しない」と日本の独楽を絶賛している²⁰。しかし、日本の独楽は注目されることなく、1879 年になるまでは書籍はおろか論文でも詳細に取り上げられることはなかった。独楽について体系的にかつ詳細に取り上げたのはマチルダ・チャプリン・エアトンである。彼女は来日し助産師の学校を開いたことで知られる人物であるが、1879 年に『日本の子どもの生活』という本を出している。子どもの生活を論じたこの書籍では玩具や遊戯についての解説も行っている。独楽については 2 ヶ所で論じている。まず 1 ヶ所目を引用する。

4 番の挿絵[図参照]において少年たちが遊んでいるのが独楽であるが、その独楽は我が国のものとは全く異なる形状をしているが、とてもよく回転する。糸に沿って独楽を動き回らせることにすぐれた人もいるが、彼らは複数の独楽を空中に投げ、キセルでそれらを受け止めることがで

きるほど優れているので、その技術を披露することで生活費を稼いでいる。

独楽の中には、木製のくぎで留められた竹の小片で作られているものがあるが、側面に刻まれた穴により回転している間空気が通り抜けるので、それらは素晴らしい音を鳴らす。²¹

独楽は英国でも遊ばれる玩具で、形状も変わらないとしているが、エアトンは独楽回し師を日本の特徴的な職業と捉えるとともに、英国にはない鳴り独楽も併せて紹介している。オールコックも独楽回し師を『大君の都』の中で紹介している²²。



図 日本人の画家《独楽》“Top Spinning.” M. Chaplin Ayrton, *Child-Life in Japan*, (London: Griffith and Farran, 1879) facing, p.8.

次に、エアトンが『日本の子どもの生活』において独楽に言及している2ヶ所目の記述を以下に引用する。これは正月の遊びを紹介する箇所に見られ、独楽もその1つであるとして次のように説明している。

日本の独楽にはいくつか種類があり、蠟で満たされた単殻の貝殻で作られているものもある。競技を目的とされた独楽は堅い木材で作られ、1種のタイヤのように重い金属の輪によって金属被覆されている。少年たちは、我が国のこどもたちとは幾分か違うやり方で独楽を巻きつけ、投

げる。競技者の目的は対戦相手の独楽に傷をつけるか回転を止めることにある。むち独楽もまた知られており、遊ばれている。²³

ここでは独楽の種類について詳しく書かれている。エアトンが『日本の子供の生活』を出版した1879年はOld Japanという観点で英国人たちが日本を捉えていた時期であり、エアトンの『日本の子どもの生活』もOld Japanという観点で書かれた書の1つとして位置づけることができる。なぜなら、遊戯を満喫する子どもこそ日本の近世社会の象徴であったからだ。例えば、オールコックは『大君の都』の中で、近代教育によって西洋の子どもたちは玩具や遊戯を楽しむという幸福を失ってしまったが、日本の子どもたちはその幸福を失っていないと述べている²⁴。70年代においてOld Japanという観点が英国で創出されたからこそ、エアトンが日本の子どもに注目したのである。

そのような70年代においてオールコックの視点はOld Japanを求めて子どもや玩具ではなく、漆器、陶磁器、屏風や扇子などの美術品や工芸品に向かう。オールコックは『日本の美術と工藝』(1878)の中で、「日本人に関して言えば、私が思うに、自然、すなわち多様性を与えるような自然の持つプロセスを詳細に探究したことで、シンメトリーの基本的な考えを導き出したということ(職人たちの特徴の)結論として示すであろう」と言及し、さらに日本の芸術には「自然への愛と多様性への愛という2つの源泉」があり、「日本人はインスピレーションを求めて自然へと向かっていく」と述べる²⁵。それゆえに、オールコックは日本の美術・工芸は卓越したものになっていると考えるとともに、自然への探求心や愛を日本の職人たちの特徴として捉えている。

1885年の日本人村の開会においてオールコックは玩具と屏風と扇子を同列に扱っているが、その理由はそれらが全て近世社会を象徴する品であったからだ。玩具は近世の子どもを、屏風と扇子は近世の職人を象徴するという差異はあるものの、70年代に創出されたOld Japanという観点はそのどちらをも包含しており、この観点に基づいて日本人村が作られたのである。既に触れたが、オールコックは職人たちの技術を見る場所として日本人村があると述べている。そのため、断定はできないものの、オールコックが独楽を筆頭に玩具からも職人の特徴、すなわち自然への探求心や愛を感じ取っていた可能性はある。

さらに、20世紀になると独楽に自然への探求心や愛を見た人物が現われる。それは1908年に出版された*Toys of Other Days*の著者ネビル・ジャクソン夫人こと、エミリー・ジャクソンである。エミリー・ジャクソンは日本の独楽発展の背景を日本人の自然への愛情に読み解く。特に独楽回し師という特殊な職業が成り立つのは

日本人が自然に対して愛情を向けているからだと結論付けたのが次の引用である。

日本のみ大道芸としての独楽回しが可能であるが、それは日本はゆれ動く竹、旋回する鷹、波打つ夏の海など自然のあらゆる美しい動きが愛情をもって見つめられている国だからである。²⁶

このようにエミリー・ジャクソンは自然への探求心や愛によって独楽を捉えているが、このことは英国において玩具もまた屏風や扇子などと同じように日本趣味の品として受容されていた証拠となる。なぜなら、馬淵明子が「日本の自然表現はヨーロッパの自然観の見直しを促し、モチーフの扱いや素材への親しみ、偶然性も含んだプロセスの楽しみ、線の律動の喜び、簡素の美などといった新たな価値観を発見させた」と述べているように、日本人の自然観、自然に対する態度こそがジャポニスム、日本趣味の根幹に根差しているものだからだ²⁷。

3. 結論

オールコックが 1885 年の日本人村の開会の挨拶において玩具と屏風と扇子を対等に扱った理由は全ての品から近世の日本の特質を見出したからである。そのような近世を見出すきっかけを与えたのが日本の文明開化である。1870 年代前半において日本は文明開化という言葉を旗印に近世社会から近代国家へと変革していった。その結果、英国人の間に New Japan と Old Japan という新しい日本の捉え方が生れてきた。オールコックはそのような Old Japan という観点を芸術や工芸に当てはめ、近世社会の特徴の 1 つであった職人の自然への探求心と愛を日本の美術品や工芸品から読み取っている。一方で、オールコックは『大君の都』(1863)において日本の子どもたちからも近世の日本の特質を見出している。それら 2 つの捉え方は、近世日本を見出そうとする Old Japan という観点により 1885 年の日本人村の開会の挨拶の中で結びつくことになったのだろう。

その後、独楽はエミリー・ジャクソンによって日本趣味と同様に自然への探求心や愛と結びつけられて理解される。さらに時代を経ると、玩具はより広いものを指すようになり、その様子は 1926 年に出された論文‘Japanese Toys and Toy-Collectors’に見ることができる²⁸。筆者のフレデリック・スタールはラフカディオ・ハーン『知られぬ日本の面影』を参照しつつ玩具の分類を始めているが、その中には神社の儀礼において用いられるような仮面や人形、さらには達磨など独楽

や凧と同類に扱うことができないような品も玩具として取り上げている。

¹ 倉田喜弘『1885年ロンドン日本人村』朝日新聞社、1983年。Hugh Cortazzi, *Japan in Late Victorian London: The Japanese Native Village in Knightsbridge and The Mikado, 1885* (Norwich: Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, 2009). 小山騰『ロンドン日本人村を作った男 謎の興行師タナカー・ブヒクロサン 1839-94』藤原書店、2015年。

² *The Times*, 12 Jan 1885, p.10. []内は執筆者。

³ Anna Jackson, “Art and Design: East Asia,” John M. MacKenzie, *The Victorian Vision Inventing New Britain* (London: V&A Publications, 2003), p.307.

⁴ 衆和沙「唯美主義の室内装飾と屏風—十九世紀イギリス人女性とジャポニスムについての一考察」『ジャポニスム研究』(ジャポニスム学会)33(2013): p.23.

⁵ *The Times*, 12 Jan 1885, p.10.

⁶ H. Reeve, ‘Sir Rutherford Alcock’s Japan,’ *Edinburgh Review* vol.117 (1863)は『ガリヴァー旅行記』を導入にしてオールコックの『大君の都』の書評を始めており、『ガリヴァー旅行記』における日本のイメージが当時の英国社会において一定の影響を与えていたことが分かる。

⁷ S. Osborn, ‘A Cruise in Japanese Waters,’ I, *Blackwood’s Edinburgh Magazine* vol.84 (1858), pp.635-646.なお、II～Vは翌年の vol.85 に掲載されている。

⁸ A. Wilson, ‘The Inland Sea of Japan,’ *Blackwood’s Edinburgh Magazine* vol.90 (1861), pp.613-623.

⁹ Charles Mac Farlane, *Japan; an Account, Geographical and Historical, from the Earliest Period at which the Islands Composing this Empire were Known to Europeans, down to the Present Time, and the Expedition Fitted out in the United States, etc.* (New York: George P. Putnam & Co., 1852)は1850年代までに西洋人たちによって書かれた日本に関する著作をまとめた論文であるが、中国、朝鮮、日本の区別がついていない。芥川龍之介は「日本の女」においてマックファーレンは朝鮮と日本の区別が出来ていないと酷評し、オールコックは正しい日本人像を述べていると賛辞している。

¹⁰ Rutherford Alcock, *The Capital of The Tycoon: a Narrative of a Three Years Residence in Japan*, vol.2, (London: Longman, Green, Longman, Roberts, & Green, 1863), p.146.

¹¹ Rutherford Alcock, ‘China and Japan,’ *Edinburgh Review* vol.122 (1865), pp.175-202.なお Alcock Rutherford, ‘The Future of Eastern Asia.’ *Macmillan’s Magazine* vol.30 (1874), pp.435-448.でも中国と日本を比較する姿勢は見られるので、日中比較は10年経てもオールコックの日本論の中で機能し続けた視点であった。

¹² Rutherford Alcock, ‘Reform in Japan,’ *Edinburgh Review* vol.136 (1872), p.267.

¹³ A. B. Mitford, *Tales of Old Japan*, vol.1, (London: Macmillan and Co., 1871), p.1.

¹⁴ Lafcadio Hearn, *Glimpses of an Unfamiliar Japan*, (Boston: Mifflin; rpt., Scotts Valley: CreateSpace Independent Publishing Platform, 2018), p.2.

-
- ¹⁵ Anna Jackson, p.312.
- ¹⁶ Rutherford Alcock, 'Japan as it was and is,' *Quarterly Review* vol.137 (1874), pp.195-196.
- ¹⁷ 日本玩具博物館編『日本と世界 おもしろ玩具図鑑』神戸:神戸新聞総合印刷、2017年、p.41。
- ¹⁸ 安藤正樹『独楽』全日本独楽回しの会 監修、文溪堂、2003年、p.5。
- ¹⁹ ルース グッドマン『ヴィクトリア朝英国人の日常生活 貴族から労働者階級まで』下、小林由果 訳、原書房、2017年、p.134。
- ²⁰ *The International Exhibition of 1862: the Illustrated Catalogue of the International Department*, 1862, vol.4, rpt. (Cambridge: Cambridge University Press, 2014), p.100.
- ²¹ M. Chaplin Ayrton, *Child-Life in Japan*, (London: Griffith and Farran, 1879; rpt., Tokyo: Kyuzansha, 1997), p.8.
- ²² Alcock, *The Capital of The Tycoon*, vol.2, pp.318-321.なお H. Reeve の『大君の都』の書評の p.522 でも独楽回し師について触れており、英国人にとって興味深い職業であったと思われる。
- ²³ Ayrton, p.115.
- ²⁴ Rutherford Alcock, vol. II, (1863), p.322.
- ²⁵ Rutherford Alcock, *Art and Art Industries in Japan*, (London: Virtue and Co, 1878), p.19, p.32.
- ²⁶ Mrs. F. Nevil Jackson, *Toys of Other Days*, (London: Country Life Library, 1908), p.237.
- ²⁷ 馬淵明子『ジャポニスムー幻想の日本』ブリュッケ、2004年、p.60。
- ²⁸ Starr Frederick, 'Japanese Toys and Toy-Collectors,' *The Transactions of The Asiatic Society of Japan*, Vol.3, 1926, pp.101-115.